

これからの地域の大学

— 高知大学の試み —

学長 相良 祐輔



はじめに

法人として出発した今日、各大学の「個性」をどう創り出すかについては、日本全国の国立大学間で大変厳しい競争が始まっております。それをどのように意識し取り組むかは、それは個々の大学の教職員の責任であります。大学の個性化に向けた、静かな、厳しい競争は意識改革の進み具合の程度に応じたものでしかないのだというところを、明確に実感して頂きたいのです。

法人化の行く手には

中期目標・中期計画は六年後にその目標・計画の達成度を国立大学法人評価委員会が評価・決定し、さらに総務省で、最終的な評価が行われる予定です。しかし、事態はさらに進んで文科省が各年度の評価を行い、総務省も独自に、五段階評価で年度評価をすと言っております。

この事態を注意深く考えますと、「四国に国立大学が一体幾つあったらいいのか」という命題に突き当たりそうであります。あわせて、今の日本の財政からして、国立大学の民営化という話にまで進む可能性ががあります。

この現状の下での法人化の行く手を考えます時、私見ですが、国立大学には二種類が必要ではないでしょうか。国立大学としての資源的諸条件をすでに備えており、激しい国際競争を行うべき大学群と、それとは別の『地域の大学』という国立大学

の一群が要るのではないかとの思いがあります。21世紀を真の市民社会の時代とするには、地方分権を推進しなければならず、そのためには、地域の智の戦略的拠点として、国が能動的に支援する充実した『地域の大学』を考えないと、成熟した市民社会は、できないのではないかと思っております。

この意味で、高知大学を『地域の大学』として新しく創造し、強くアピールする必要があると考えております。

国立大学に、民間的発想の経営手法を入れるという意味は、市場の自由競争原理を無限定に取り入れるのではなく、第三者による評価原理を導入するということです。世界最高水準の大学を創るために競争原理を入れるという事は、資源のない日本が、これから、世界と知的な国際競争をすることだけではありません。いわゆる地球的な規模において、あらゆる面で調和のとれた活動のできる、そのリーダーを創るという意味で、人材の大国を創るのだと解すべきです。国際競争に勝つことばかりを目的とするような人間を創るのではなく、世界から、敬意と信頼をもつて遇せられる人材大国の創造を考えるべきです。

また地域の活性化、地方分権を進めていく時に、いかに『地域の大学』が大きな意味を持つのかを、理解せねばなりません。

日本の将来は国際競争の大学だけが決めるのではなく、むしろ、日本という国を支える地域を創造する『地域の大学』の役割が極めて大きく、それが21世紀における時代の要請ではないのかと考えます。

遠山プランにいう最高水準の大学創りとは、これまでの大学が、それぞれの歴史のなかで、優越感とか優位性とかではなくて、新しく、独自の個性を備えた世界水準の大学創りを行う、そのことを国家的に世界に発信するという意味だと理解しております。21世紀というこれからの時代の中で、本当の市民社会を日本に創り出すためには、地域の智の戦略的拠点としての『地域の大学』をどう育てるのか、この問題を抜きにしては、高等教育制度の在り方は考えられません。国立大学の機能的分担を、立地条件を柱に、考えなければいけないのです。法人化は単に財政的な理由に止めず、今後の百年を見据えた教育改革を成し遂げるといふことにしなければ、日本の将来は極めて危うい、と考えています。

この基本的考えに基づいて、高知大学を「知の世紀の担い手たるべき地域の大学」として新しく創りあげなければ、その存在意義を失うといわざるを得ません。

現状の認識

さて、国立大学法人の将来については、

いろいろな立場から、国立大学の再再編という事態の生じる可能性は極めて高いと考えられます。この再再編の分かれ目の時には、より現実的な厳しい競争による淘汰を、国立大学は受けなければならぬことは、自明の理ともいえます。

今までお話しした諸情勢からすると、私達の考えの中に、四国に大学はいくつ必要なのかという厳しい問題を、忘れてはいけないと考えます。

そこで日本国民にとって、本当に高知大学という大学があるのかという事です。今日、東京とか大阪とかの街頭に出て聞くとします。「高知大学って何？」という返事が返ってくるのではないのでしょうか。一方、帯屋町で「高知大学は必要でしょうか。」

か」と県民に尋ねると、「無いと困るかな……」という程度の返事になるのではないのでしょうか。次に高知大学が無くなる時点では、東京で「高知大学が無くなるんですが、どう思います」と尋ねると、「そりゃあ努力が不十分だったのではありません」という反応で終わると思いますが、高知県民にとっては、そうはいかないと思います。現在高知大学は、おおよそ年に二五〇億円の予算で経営されており、約六、〇〇〇人の学生がおります。この学生たちが、毎年高知県に落としているお金を加えて考えるだけでも、高知大学が無くなることは高知県には未曾有の問題になるうかと思っております。

私が役員会のスタートで申し上げたこと

この大学——高知大学の試み——

講師 相良 誠



くなるとなれば、土佐人に、どう説明するのか。そこところを、皆さんよく納得してこの二年間を過ごして頂きたい。」と申し上げてあります。土佐の人の気質は、だからこそ応援もしてくれろというところがあります。我々が一生懸命努力していくという事が、土佐の人、高知県民に理解さえしていただければ、他の県では考えられない、実に強い支援や応援が生まれてくる、これが土佐人の特徴だと思えます。だから我々は、再々編の時、必ず国立大学で在り続けられる努力を、大学人として、県民が何処から見ても納得する、恥ずかしくない努力を、今、しておかないといけないと思っております。

評価で大切なものに、第三者評価があります。第三者評価で最も大切な評価は、属している地域からの目だと考えています。国立大学は、これまで、さまざま理由があったでしょうが、あまりにも地域の中に無関心でありすぎたと考えています。

国立大学法人高知大学のあり方

大学の使命である「教育」「研究」「社会・国際貢献」を、個性的な有機性をもって巧みに機能させて初めて、『地域の大学』として、欠くことのできない高知大学の存在理由を明らかにできると考えています。

その具現の方法は、第一義に、Facultiesすなわち教職員一人一人、学部それぞれ

れが自己責任を明確に意識した活動をす、その上、このFacultiesをUniteする、すなわち「United Faculties of KOCHI UNIVERSITY」と申し上げております。今多くの大学人は、Facultiesの活動を重点的になさっているが、自己責任を自覚したFacultiesの活動だけでは、『地域の大学』たり得ないのです。それぞれの活動を、機動性を持つ、統率のとれた有機体にならないと存在の意義が見いだせないのです。人間は、摂取した食事を無意識に消化・栄養吸収をし、心臓も自律的に働いています。こうした各種臓器すなわちFacultiesが、統率のとれた機能環を形作って初めて、人間としての働きができていものと同じです。

「United Faculties of KOCHI UNIVERSITY」となつてこそ、『地域の大学』としての高知大学のレーゾン・デートルが見いだせるのです。

国も、大学人も、地域の人たちも、一緒になつて、『地域の大学』を、どう創り上げるか、この一点こそ、国立大学法人高知大学のあり方の第一義の問題と考えています。

